

日技指定研修「顎口腔機能学」

「顎口腔機能学」をわかりやすく
—これからの歯科技工に求められていること—

日本歯科大学名誉教授

小出 馨

医療の目的は人の健康維持です。その中で歯科医療の果たす役割は、歯列をはじめとする顎口腔系の再建と保全による諸機能の維持増進で、諸機能には咀嚼、嚥下、呼吸、発音、口腔感覚、審美、姿勢維持などが含まれます。

そして、医療の中でも唯一歯科だけが介入できる咬合治療は、顎口腔系のみならず全身の健康や身体運動能力に、ひいては国民の日々の生活の質や健康寿命にまで大きく影響を及ぼす極めて重要な要素です。さらに咬合は、前頭前野をはじめとする脳機能の活性化、生きることへの意欲の回復、精神心理状態の改善にまで影響し、人生の満足度の観点からも極めて重大な役割を果たしています。

また近年、患者さんから咬合が顎関節や全身に及ぼす影響、さらにその不調和に由来する様々な症状についての問い合わせが大変多くなってきており、患者さんの咬合と全身に対する認識が大きく変化してきていることを痛感させられます。特に補綴による咬合治療を臨床現場で実際に行う歯科医師と歯科技工士が、十分に認識しておかなければならない重要事項は、顎口腔系の調和をみだす補綴治療を行ったとしても、直後には顕著な影響は現われてこず、治療後数ヶ月～1年以上経過してから顎関節や筋、そして全身の様々な症状や障害となって発現してくる場合が多いことです。私達歯科医療者には、専門領域である咬合と顎関節に関する十分な理解と治療内容の更なる高度化が強く求められているのです。

今回の研修では、今後歯科の目指すべき方向性と、歯科医師と歯科技工士の円滑な連携のために不可欠な「顎口腔機能学の要点」と「咬合の再構築基準」を臨床に即してお示しします。会場に来て下さった皆様と、これからの歯科医療のあり方、その役割とやり甲斐の大きさをご一緒に確認したいと思っています。

どうぞ宜しくお願い致します。

『顎口腔機能学』をわかりやすく！
～咬合器設定のちがいによる臨床例～

公益社団法人 日本歯科技工士会
会長 森野 隆

1995年に「歯科技工士教本『顎口腔機能学』」が発行され、新たに新学科目として加わりました。その後約10年を経過した2007年に改訂されています。すなわち、全くこの学科目を学生時代に履修していない方、1995年から2006年までの教本で学んだ方、2007年から2016年までの新教本、それ以降の改訂版の教本で学んだ方と4つのグループに分けることができます。

そこで今回の研修では、「顎口腔機能学」で新たに加わった「顎口腔系の機能」、「顎口腔系の形態」に関する事項と、2007年以降に加わった内容を紹介させていただきたいと考えております。

また、実際の臨床での咬合器の調整機能（矢状顎路、側方顎路、平衡側側方顎路、作業側側方顎路）設定の違いにより、作成する補綴物の咬合関係にどのような影響が出るかをお見せしようと思えます。

生体に調和した補綴物製作には不可欠な、顎口腔機能の最低限の知識を少ない時間ですが提供させて頂き、各自が自ら学ぶきっかけになって頂ければと考えております。